

C-1 老人衣服の保温性に関する衛生学的研究

奈良教育大 ○中谷和 和歌山大教育 福本富美子 茶女大 水梨サワ子

目的 昨年度本学会総会において報告した研究に引き続き、全く同様の目的をもって、老人の着衣状態とその体温調節の実態把握のための実験をおこなった。そして、今回は環境気温 26 ± 0.5 ℃ と 12 ± 0.5 ℃ における実験を追加し、ほぼ1年間の老人の衣服気候について検討した。

方法 実験の方法、測定項目などは、既に報告済なので省略する。唯、実験の時期によって被験者数・実験の繰返し回数に多少変動がある。

結果 1、着衣状態についての着衣枚数・衣服重量などは各環境温において、男女ともに1971年におこなわれたIBPに基づく同年令層の全国衣服調査成績平均値 (g/cm^2) よりは少なかった。つまり、殆どの被験者は薄着をしていたと云える。

2、平均皮膚温の被験者別温差は小で、ほぼ、 33 ± 1 ℃ の範囲内で快適域にある。身体部位別には、外気温の低下とともに、特に手先・足先の皮膚温が他の部位より稍々顕著に変化し、降下する傾向がみられた。

3、クロ値は、従来の成人女子の場合より僅かに大きく、産熱量・体重減少量においても増加の傾向がある。

以上のように実験の結果をまとめ、IBP (耐寒熱特定研究) に基づく全国調査との比較・長野地方の高年令層着衣実験結果との比較・年令差による保温性の変動の有無なども調査・検討したが、今回の実験成績では、老人の特徴は他に比較して、期待できる程大きくない。

以上